

特別養護老人ホーム いこいの杜

1 基本方針

入居者が、楽しく生き生きと安心して過ごすことが出来る環境作りに努める。

よりよいサービスを提供するために、専門職としての倫理と誇りを持ち、技能の研鑽に努める。

入居者、家族、地域住民との連携を強め、地域に開かれた信頼される施設づくりに努める。

入居者一人ひとりの尊厳と個別の暮らしが大切にされ継続できるよう、家庭的な環境と暖かで専門的ケアの中で支援するとともに、地域との連携を大切に、信頼され透明性の高い施設運営を目指す。

2 利用者の状況（令和5年3月31日現在）

（1）入退所の状況

定 員		前年度末 利用者数	令和４年度中の入退所状況						利 用 延人員	年間平均 稼 働 率	年 度 末 利用者数
			入所	退所	退所理由別						
					施設 移管	契約解除 (入院等)	家庭 復帰	死亡			
80人		79人	15人	25人	1人	7人	0人	17人	26,366人	90.29%	69人
3年度	80人	78人	22人	21人	0人	8人	0人	13人	27,189人	93.11%	79人

（2）利用者の介護度別人員

性別	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	計
男 性	0人	0人	3人	11人	8人	22人
女 性	0人	0人	5人	22人	20人	47人
計	0人	0人	8人	33人	28人	69人

（平均介護度4.29）

3 事業の実施状況

（1）多職種協働によるチームケアの充実

ア 認知症ケア

（ア）認知症介護実践者研修課題や認知症介護実践者リーダー研修事前課題の取り組みを基に、認知症の人に寄り添った関わり方、生活のしづらさの理解など多視点からの評価、分析手法を用いてリフレーミングする専門的な知識の向上を図る取り組みを全体で共有、また、専門用語の理解や人的環境の大切さなどネット動画配信を活用し自由に学習する機会を設けた。

イ 口腔嚥下機能

（ア）毎月口腔ケアマネジメント計画を作成し、歯科医師助言に基づいた口腔ケアを実施・評価すると共に、歯科衛生士の指導による個別口腔ケアの実践に努めた。また、最後まで食べることの大切さ「味わい」や食を介しての「絆・癒やし」、オーラルフレイルに焦点を当て、口腔体操による口腔嚥下機能の維持の取り組みの強化を行った。

ウ 事故防止

(ア) 繰り返されるリスクについて、RCA 分析シート、紐解きシートの考え方から、それぞれがユニットの現状を理解し、何故と原因を追及した紐解き研修を行った。下期にはクオリティーインプルーブメント、より質の高いサービスを提供し事故を未然に回避するという考え方を基に、ユニット毎入居者の生活を見つめ直し「充実した私の生活」と「想定されるリスク」に着眼する考え方の重要性を伝えていった。

エ 身体的拘束適正化・虐待防止

(ア) 年に1度、虐待防止指針内容の確認、ユニット毎にお互いのケアを見つめ合う虐待の芽改善チェックシートを作成し、不適切ケアに対する意識が高まるよう努めた。
(イ) 職員が抱えるケア時の心の問題として「拘束にあたるのではないか」という不安な心に対して、衛生的な観点や健康管理面などから、その方の生命を守るという視点、その時に発生する思いやりの感情や安心感を与えるコミュニケーションがそのケアに存在するか否かによって、大きく変化するのではないかという心理的な研修を実施した。そして、問題を一人で抱え込まないように、チームで相談しやすい職場環境作りの機会を設け取り組んだ。

(ウ) 3ヶ月毎に実施予定の身体的拘束適正化委員会及び虐待防止検討委員会は2回対面会議を実施し、2回はコロナ感染対策のため、書面会議により第三者委員に意見を伺った。

オ 医療的ケア

(ア) 医療と介護が連携し、安全な医療的ケアを実施、毎月リスクの有無の確認を行い事故発生防止に努めた。
(イ) 喀痰吸引研修受講1名、実地研修2名修了。経管栄養・喀痰吸引学習のDVD視聴研修を実施した。

カ エンド・オブ・ライフケア

(ア) 「老いる」「家族の思い」に焦点をあて終末期という繊細な部分への心配りについて、精神的ケア研修とダブルリングし、聖マリアンナ医科大学「いのちを見つめた900日」から命の尊さ、家族の心に赴きをおいた伝え方やチームケアの重要性を研修した。4月から3月に8名の方を施設内で看取った。

キ 自律支援

(ア) 基本ケアの「基本を整える」と共に福祉用具の安全かつ適正な使用の促進、自立度を考慮した生活リハビリによる機能維持向上・褥瘡・拘縮予防に焦点をおき、その人らしい活動を支援している。

(2) 経営改善・基盤の確立

ア 稼働率は、4月～3月平均稼働率90.3%と目標稼働率96%を下回った。入所希望者の重篤化（持病）や入院後の帰設が難しいケースなど入所と退所の同時進行により空床期間が長くなっているためと思われる。また、入所申込みも減少して来ている。

イ 総合的な防災、減災対策に取り組み、各訓練や災害時の「備え」の点検を定期的に行った。特に停電が多いため大雨毎や降雪毎に注意事項の周知を強化し、ライフライン停止を想定した炊き出し訓練を1回実施した。火災訓練は夜勤者の連携に重点をお

き、早急な対処方法のポイントを伝えていった。通報訓練は、電話連絡とさくらメール斉送信訓練を実施した。

- ウ 県内の新型コロナウイルス感染状況悪化の影響を受け、入居者・職員に陽性者が発生、8月（入居者5名、職員3名感染）、11月（入居者4名、職員5名感染）、それぞれ2ユニットずつ完全閉鎖し2週間の防護体制をとった。上期においては家族間で濃厚接触となり自宅待機中に陽性になるケースが増え、下期に、嘱託医の助言を基に検査、防護体制の基準を緩和し業務体制の負担の軽減を図った。7月から8月にかけて、希望する入居者・職員のコロナワクチン接種を実施した。（入居者54人、職員46人）
- エ カビ対策として、全ユニット天然成分の滅菌・防カビ薬剤を壁に塗布し予防した。

（3）職員資質の向上と人材育成

- ア ユニットリーダー研修1名・認知症介護基礎研修1名・認知症介護実践者研修2名・認知症介護実践リーダー研修1名受講した。
介護支援専門員資格1名取得、介護福祉士資格1名取得。
- イ 研修形態のオンライン化が定着する中、昨年度に続き（株）お茶の水ケアサービス学院オンライン研修を活用し、運営上必要な研修、個々の研修目標に沿った研修など幅広い内容の研修を実施した。
- ウ 面談を通じた個別研修計画により、各自の目標を確認し、自己成長を図る取り組みや資格取得の推進を行った

（4）地域との連携・交流の促進

- ア 新型コロナ感染防止対策を講じながら、湖陵高校学生ボランティアの受け入れを実施した。入居者に直接関わらないよう地域交流室や外活動で受入れを実施し、ティッシュ折りなど介護に必要な物品作りの活動や入居者が散歩中に花を楽しめるよう球根植えをしていただいた。資格取得に必要な実習等は、看護大学現場実習4名、社会福祉専門学校施設実習3名を受け入れた。
- イ 見学者には、継続して自作の施設案内動画を活用し説明PRを行った。
- ウ 余暇活動は継続し、ユニット毎に職員が季節に合わせた楽しみのある生活の提供に努めた。絵手紙も継続し講師に作品の見本を提供していただき交流を図った。
- エ 昨年度に続き、コロナ禍、中の茶屋地区の自治会長さんの協力を得て一人暮らしの高齢者に手作り和菓子などを提供し、心の交流を図った。
- オ 展示協力ボランティアとして、定期的に地域交流室の写真の入れ替えをしていただきコミュニティの一つとなっている。
- カ 介護労働安定センターの実務者研修講義講師として2日間1名派遣した。施設見学の受入れとしていこいの杜紹介動画説明に人材研修センターへ出向いた。
- キ 湖陵高校食事支援実習、講義講師として職員1名派遣した。

（5）労働環境の整備

- ア 福祉用具を効果的に用い、介護負担の軽減に努めた。床走行式リフトが故障し1台更新した。
- イ 新型コロナ感染防止対策実施による福祉従事者としての意識や新たな行動様式の先進的な情報をいち早く提供し、負担感や先の見えない不安感閉塞感などメンタルや体調管理のサポートに留意した。

- ウ 新任職員の習熟度に合わせた勤務形態やパート職員それぞれの働き方希望に配慮したシフトを組み、安心して働けるサポート体制を取った。
- エ 勤怠システムを活用した労働時間の管理と業務の効率化、業務負担の軽減、時間外勤務の軽減を推進し、労働環境整備に努めた。
- オ ストレスチェックを実施し、個々のストレスや集団のストレス傾向など仕事への負担度について産業医の助言を受けながら分析を行った。

4 実習、ボランティアの受入状況

(1) 実習の受入実績

実習受入先	受入期間	実人員	延人員
介護労働講習施設実習、見学（出張講義）	6月、8月	30人	45人
警察学校車いす講習（出張講習）	9月、12月	32人	32人
鳥取インターンシップ（大学生）	9月	1人	1人
鳥取看護大学臨地実習	10月	3人	21人
鳥取市医療看護専門学校	11月	2人	4人
湖陵高校食事支援実習（出張講義）	1月	24人	24人
計		92人	127人

(2) ボランティアの受入実績

絵手紙・湖陵高校・四季の写真展示・油絵展示・リアル粘土細工展示・水彩画展示

（計：延べ 49人（資料提供・アドバイス含）